

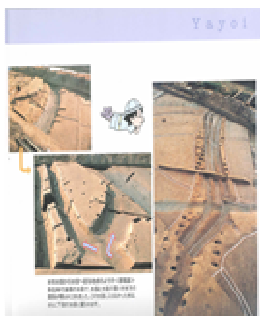
“考古ファンのじゃれごと”⑧

縄文人と弥生人の関りを

記紀に見る(猿田彦のこと)

私は予(かね)てから、約2500年の昔に中国の江南(呉の時代)地方から水耕稲作の技術を携えて日本列島に渡来し、先住民である縄文人と「和合」し新しく、弥生人の社会ができて今日があると信じて来た。残念ながら素人の浅ましきで、それを立証することが出来ないでいた。そんな矢先に歴史研究会が発行している「歴史研究」なる冊子が届いた。その中に三重県鈴鹿の会員で小林伊佐夫氏の論文「私説 猿田彦の正体」が目にとまり合点した次第である。

記紀による神話の世界に出てくる、猿田彦のことは一般に良く知られている。道先案内の神として身近な存在である。高天ノ原から葦原の瑞穂の国(当時の日本列島)に、ニニギノミコトら一行が降臨した時に、地元の国神(くにつかみ)の猿田彦が案内した件(くだり)の説話である。当時(縄文晩期)の日本列島には、豊かな森に木が茂り、清らかな水が小川に流れ、果樹の実も豊富で、川の浅瀬では魚も捕れたし葦原が広がって、先住民(縄文人)が住んでいた。そんな光景が眼に浮かぶ。そこに天神(あまつかみ)が渡来して来て日本国を統治することになる。



「百間川の遺跡探検」より 水田の様子

岡山県古代吉備文化財センターのパンフより

先住民も穀物の中でも稲=米の美味しさを知っていて、陸稲を栽培し焼畑を続けながら移動していた。稲の欠点である連作障害を乗り越えるためには、焼畑で移動しながらの耕作であった。そこに水耕稲作技術を持った渡来人は、故郷の中国江南地方に比べ、より管理のしやすい豊富な小川が随所にある日本列島に定住して稲作を始めた。質・量とも先住民の陸稲とは比較にならない。遠くで見ていた縄文人は、戦って排斥するのではなく「和合」の道を選び、お互いの長所・技術・経験を生かした「共生」が始まった。と私は推論している。

和合の証拠が古事記に猿田彦として登場していたのだ。縄文人の末裔であるアイヌの人々が使っていることばを研究し精査された、小林伊佐夫氏は概ね次のように説明されている。

「猿田彦の猿(サル)はアイヌ語で葦原を意味し、田(タ)はある(有る・在る)を意味する。彦はオトコ(男)の意味で、芦原に住む人達」

との明快な解説である。さすれば国神が天神を案内したとする古事記の編纂者は、当時から約1000年も昔のことを、猿田彦との逸話として我々に残してくれたことになる。

全国歴史研究会の仲間の研究成果で、私の推論がまた一つ確証された。新しい学びを得た「歴史研究」の冊子であった。

2013. 25. 2. 28



弥生末期 岡山の百間川遺跡では田植えをし
弥生人の足跡も残っていた 山崎撮影